

【テキスト中に現れる記号について】

〈 〉：ルビ

（例）薔薇<sup>ばら</sup>

—：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）彼<sup>ら</sup>一等

「#」：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数）

（例）「#「てへん+筆」、第<sup>4</sup>水準2-78-12」

それは漆黒の自動車であった。

その自動車が軽井沢ステーションの表口まで来て停<sup>と</sup>まると、中から一人のドイツ人らしい娘を降した。

彼はそれがあんまり美しい車だったのでタクシイではあるまいと思っただが、娘がおりるとき何か運転手にちらと渡すのを見たので、彼は黄いろい帽子をかぶった娘とすれちがいながら、自動車の方へ歩いて行った。



れを見違えてしまふくらいだった。彼は毎年この避暑地の盛り時にばかり来ていたからである。

彼はしかしすぐに見おぼえのある郵便局を見つけた。

その郵便局の前には、色とりどりの服装をした西洋婦人たちがむらがつっていた。

歩きながら遠くから見ている彼には、それがまるで虹のように見えた。

それを見ると去年のさまざまな思い出がやっと彼の中にも蘇<sup>よみがえ</sup>ってきた。やがて彼には彼女たちのお喋<sup>しゃべ</sup>舌<sup>り</sup>が手にとるように聞えてきた。彼は彼女たちのそばをまるで小鳥の囀<sup>なえず</sup>っている樹の下を通るような感動をもつて通り過ぎた。

そのとき彼はひよいと、向うの曲り角を一人の少女が曲つて行ったのを認めたのである。

おや、彼女かしら？

そう思つて彼は一気にその曲り角まで歩いて行った。そこには西洋人たちが「巨人の椅子<sup>ジャイアンツ・チェア</sup>」と呼んでいる丘へ通ずる一本の小径<sup>こみち</sup>があり、その小径をいまの少女が歩いて行きつつあった。思ったよりも遠くへ行つていかなかった。

そしてまちがいなく彼女であつた。

彼もホテルとは反対の方向のその小径へ曲つた。その小径には彼女きりしか歩いていないのである。彼は彼女に声をかけようとして何故<sup>なぜ</sup>だか躊躇<sup>ちゆうちゆう</sup>をした。すると彼は急に変な気持になりだした。彼はすべてのものを水の中のように空気の中で感ずるのである。たいへん歩きにくい。おもわず魚のようなものをふんづける。彼の貝殻の耳をかすめてゆく小さい魚もいる。自転車のようなものもある。

また犬が吠えたり、鶏が鳴いたりするのが、はるかな水の表面からのように聞えてくる。そして木の葉がふれあっているのか、水が舐めあっているのか、そういうかすかな音がたえず頭の上でしている。

彼はもう彼女に声をかけなければいけないと思う。が、そう思うだけで、彼は自分の口がコルクで栓をされているように感ずる。だんだん頭の上でざわざわいう音が激しくなる。ふと彼はむこうに見おぼえのある紅殻色のバンガロオを見る。

そのバンガロオのまわりに緑の茂みがあり、その中へ彼女の姿が消えてゆく……

それを見ると急に彼の意識がはつきりした。彼は彼女のあとからすぐ彼女の家を訪問するのは、すこし工合が悪いと思った。しかたなしに彼はその小径を往ったり来たりしていた。いいことに人はひとりも通らなかつた。そうして漸く「巨人の椅子」の麓の方から近づいてくる人の足音が聞えたとき、彼は何を思ったのか自分でも分らずに、小径のそばの草叢の中に身をかくした。彼はその隠れ場から一人の西洋人が大股にそして快活そうに歩き過ぎるのを見ていた。

彼女はまだ庭園の中にいた。彼女はさつき振りかえったときに自分が自分の後から来るのを見たのである。しかし彼女は立止って彼を待とうとはしなかつた。なぜかそうすることに羞しさを感じた。そして彼女はたえず彼の眼が遠くから自分の脊中に向けられているのをすこしむず痒く感じていた。彼女はその脊中で木の葉の蔭と日向とが美しく混り合いながら絶えず変化していることを想像した。

彼女は庭園の中で彼を待っていた。しかし彼はなかなか這入<sup>はい</sup>つて来なかった。彼が何をぐずぐずしているのか分るような気がした。数分後、彼女はやっと門を這入<sup>はい</sup>つて来る彼を見たのであった。

彼はばかに元気よく帽子を取った。それにつり込まれて彼女までが、愛らしい、おどけた微笑を浮べたほどであった。そして彼女は彼と話しはじめるが早いか、彼が肉体を恢復<sup>かいふく</sup>したすべての人のように、みように新鮮な感受性を持っているのを見のがさなかった。

「お病気はもういいの？」

「ええ、すっかりいいんです」

彼はそう答えながら彼女の顔をまぶしそうに見つめた。

彼女の顔はクラシックの美しさを持っていた。その薔薇の皮膚はすこし重たそうであった。そうして笑う時はそこにただ笑いが漂うようであった。彼はいつもこっそりと彼女を「ルウベンスの偽画」と呼んでいた。

まぶしそうに彼女を見つめた時、彼はそれをじつに新鮮に感じた。いままでに感じたことのないものが感じられて来るように思った。そうして彼は彼女の齒ばかりを見た。腰ばかりを見た。その間に、彼は病気のごとは少しも話そうとはしなかった。そういう現実<sup>じゆん</sup>の煩さかったことを思い出すことは何の価値もないように彼は思っていた。そのかわりに彼は、真白なクッションのある黒い自動車の中に黄いろい帽子をかぶった娘の乗っていたのが、西洋の小説のように美しかったことなどを好んで話すのだった。そしてその娘の香<sup>にお</sup>いがまだ残っていた美しい自動車に乗ってきたのだと愉快そうに言った。

しかし彼はその自動車の中に残っていた唾のことは言わないでしまった。そうした方がいいと思ったのだった。が、それを言わないでいると、その唾が花弁のように感じられたあの時の快感がへんに鮮かにいつまでも彼の中に残っていそうな気がするのだ。こいつはいけないと思った。その時から少しずつ彼は吃<sup>ども</sup>るようになって見えた。そして彼はもう不器用にしか話せなかった。一方、そういう彼を彼女は持てあますのだった。そこでしかたがなしに彼女は言った。

「家へはいりませんか？」

「ええ」

しかし二人はもつと庭園の中にいたかった。けれども今の言葉がおかしなものになってしまいそうなので、二人はやっと家の中へはいろいろとしたのであった。

そのとき二人は、露台の上からあたかも天使のように、彼等の方を見下ろしている彼女の母に気がついた。二人は思わず顔を赧<sup>あか</sup>らめながら、それをまぶしそうに見上げた。

「#アステリズム、1・12・94」

翌日、彼女たちはドライブに彼を誘った。

自動車は夏の末近い寂しい高原の中を快い音を立てながら走った。

三人は自動車の中ではほとんど喋舌らないでいた。しかし風景の変化の中に三人ともほとんど同様の快さを感じていたので、それは快い沈黙であった。ときどきかすかな声とその沈黙を破った。が、それはすぐまた元の深い沈黙の中に吸いこまれてしまうので誰も何

も言わなかったのではないかと思われるほどのものであった。

「まあ、あの小さい雲……（夫人の指に沿ってずっと目を持ってゆくと、そこに、一つの赤い屋根の上に、ちょうど貝殻のような雲が浮んでいた）ずいぶん可愛らしいじゃないの」

それから後は浅間山の麓のグリーン・ホテルに着くまで、ずっと夫人の引きしまった指と彼女のふつくらした指をかわるがわる眺めていた。沈黙がそれを彼に許した。

ホテルはからっぽだった。もう客がみんな引上げてしまったので今日あたり閉じようと思っていたのだ、とボオイが言っていた。

バルコニーに出て行った彼等は、季節の去った跡のなんとない醜さをまのあたりの風景に感じずにはいられなかった。ただ浅間山の麓だけが光沢のよいスロオプを滑らかに描いていた。

バルコニーの下に平らな屋根があり、低い欄干をまたぐと、すぐその屋根の上へ出られそうであった。そんなに屋根が平らで、そんなに欄干が低いのを見たとき、彼女が言った。

「ちよつとあの上を歩いてみたいようね」

夫人は、彼と一しよに下りてもらえばいいじゃないのと彼女に心えた。それを聞くと彼は無造作に屋根の上に出て行った。彼女も笑いながら彼について来た。そして二人が屋根の端まで歩いて行った時、彼はすこし不安になりだした。それは屋根のわずかな傾斜から身体不安定が微妙に感じられるせいばかりではなかった。

その屋根の端で彼はふと彼女の手とその指環を見たのである。そして彼女が何でもなかったのに滑りそうな真似をして指環が彼の指を痛くするほど、彼の手を強く掴むかも知れないと空想した。する

と彼はへんに不安になった。そして急に彼は屋根のわずかな傾斜を鋭く感じだした。

「もう行きましょう」そう彼女が言った時、彼は思わずほっとした。彼女は先に一人でバルコニーに上ってしまった。彼もそのあとから上ろうとして、バルコニーで夫人と彼女の話しあっているのを聞いた。

「何か見えて？」

「ええ、私達の運転手が、下でブランコに乗ってるのを見ちゃったのよ」

「それだけだったの？」

皿とスプーンの音が聞えてきた。彼はひとりで顔を赧くしながら、バルコニーへ上って行った。

夫人の「それだけだったの？」を彼はお茶をのんでいる間や、帰途の自動車の中で、しきりに思い出した。その声には夫人の無邪気な笑いがふくまれているようでもあった。また、やさしい皮肉のようでもあった。それからまた、何んでも無いようでもあった。……

「#アステリズム、1-12-94」

翌日、彼が彼女たちの家を訪問すると、二人とも他家へ、お茶に招よばれていて留守だった。

彼はひとりで「巨人の椅子」に登ってみようとした。が、すぐ、それもつまらない気がして町へ引きかえした。そして本町通りをぶらぶらしていた。すると彼は、彼の行手に一人の見おぼえのあるお



嬢さんが歩いていているのに気がついた。それは毎年この避暑地に来る  
 或る有名な男爵のお嬢さんであった。

去年なども、彼はよく峠道や森の中でこのお嬢さんが馬に乗って  
 いるのに出逢った。そういう時いつも彼女のまわりには五六人の混  
 血児らしい青年たちがむらがっているものであった。一しよに馬や自  
 転車などを走らせながら。

彼もこのお嬢さんを刺青をした蝶のように美しいと思っていた。  
 しかし、それだけのことで、彼はむろんこのお嬢さんのことなどそ  
 う気にとめてもいなかった。が、ただ彼女を取りまいてるそうい  
 う混血児たちは何とはなしに不愉快だった。それは軽い嫉妬のよう  
 なものであるかも知れないが、それくらいに関心は彼もこのお嬢さ  
 んに持っていたと言ってもいいのである。

それで彼は何の気もなくそのお嬢さんのあとから歩いて行ったが、  
 そのうち向うからちらほらとやってくる人人の中に、ふと一人の青  
 年を認めた。それは去年の夏、ずっと彼女のそばに附添ってテニス  
 やダンスの相手をしていた混血児らしい青年であった。彼はそれを  
 見るとすこし顔をしかめながら出来るだけ早くこの場を離れてしま  
 おうと思った。その時、彼はまことに思いがけないことを発見した。  
 というのは、そのお嬢さんとその青年とは互にすこしも気づかぬよ  
 うに装いながら、そのまますれちがってしまったからである。唯、  
 そのすれちがおうとした瞬間、その青年の顔は悪い硝子を透して見  
 るように歪んだ。それからこっさりとお嬢さんの方をふり向いた。  
 その顔にはいかにも苦にがしいような表情が浮んでいた。

このエピソードは彼を妙に感動させた。彼はその意地悪そうなお

嬢さんに一種の異常な魅力のようなものをさえ感じた。勿論、<sup>もちろん</sup>彼はその混血児の側にはすこしも同情する気になれなかった。

その晩はベッドへ横になってからも、何度も同じところへ飛んでくる一匹の蛾<sup>が</sup>のように、そのお嬢さんの姿がうるさいくらいに彼のつぶった眼の中に現れたり消えたりするのであった。彼はそれを払い退けるために彼の「ルウベンスの偽画」を思い浮べようとした。が、それが前者に比べるとまるで変色してしまった古い複製のようには見えなことが、一そう彼を苦しめた。

「#アステリズム、1-12-94」

しかし翌朝になってみると、そのふしぎな魅力は夜の蛾のようにもう何処かへ姿を消してしまっていた。そうして彼は何となく爽やかな気がした。

午前中、彼は長いこと散歩をした。そして、とあるロτζジの中で冷たい牛乳を飲みながら、しばらく休むことにした。彼はこんなに爽やかな気分の中でなら、夫人たちに昨日からのエピソードを打明けても少しもこだわるようなことはないだろうと思っただほどであった。

それは町からやや離れた小さな落葉松<sup>からまつ</sup>の林の中にあつた。

木のテエブルに頬杖<sup>ほおづえ</sup>をついている彼の頭上では、一匹の鸚鵡<sup>おつむ</sup>が人間の声を真似していた。

しかし彼はその鸚鵡の言葉を聴<sup>き</sup>こうとはしなかった。彼は熱心に彼の「ルウベンスの偽画」を虚空に描いていた。それが何時<sup>いつ</sup>になく生き生きした色彩を帯びているのが彼には快かった。……

その瞬間、彼は彼のところからは木の枝に遮さえぎられて見えない小径の上を二台の自転車が走って来て、そのロジの前まへに停まるのを聞いた。それからまだその姿は見えないけれど、若い娘特有の透明な声が聞えてきた。

「なんか飲んで行かない？」

その声を聞くと彼はびっくりした。

「またかい。これで三度目だぜ」そう若い男の声が応じた。

彼は何となく不安そうにロジの中にはいつてくる二人を見つめた。意外にもそれはきのうのお嬢さんだった。それから彼のはじめに見る上品な顔つきをした青年だった。

その青年は彼をちらりと見て、彼から一番離れたテーブルに坐ろうとした。するとお嬢さんが言った。

「鸚鵡のそばの方がいいわ」

そして二人は彼のすぐ隣りのテーブルに坐った。

お嬢さんは彼に脊せなかを向けて坐ったが、彼には何だかわざとかの女がそうしたように思われた。鸚鵡は一そう喧やかましく人真ひとまね似にをしだした。かの女はときどきその鸚鵡を見るために脊せなかを動かした。その度毎たびごとに彼はかの女の脊せなかから彼の眼をそらした。

お嬢さんはその青年と鸚鵡とをかわるがわる相手にしながら絶えず喋しゃべ舌べっていた。その声はどうかすると「ルウベンスの偽画」のこゝろにそっくりになった。さつきこのお嬢さんの声を聞いて彼がびっくりしたのはそのせいであつたのだ。

お嬢さんの相手の青年はその顔つきばかりではなしに、全体の上品な様子が去年の混血児たちとはすこぶる異ちがつていた。すべてがいかにもおっとりとして貴族的であつた。そういう両者の対照の中に

彼は何となくツルゲエネフの小説めいたものさえ感じたほどだった。この頃になってこのお嬢さんはやつとかの女の境涯を自覚したのかも知れない。……そんなことをいい気になって空想していると、彼は彼自身までがうっかりその小説の中に引きずり込まれて行きそつで不安になった。

彼はもつとここに居てみようか、それとも出て行ってしまおうかと暫く躊躇ちゅうちゆしていた。鸚鵡は相変らず人間の声を真似していた。それをいくら聴いていても、彼にはその言葉がすこしも分らなかつた。それが彼にはなんだか彼の心の中の混雑を暗示するように思われた。

彼はいきなり立ちあがると不器用な歩き方でロッジを出て行った。

ロッジのそとへ出ると、二台の自転車がそのハンドルとハンドルとを、腕と腕とのようにからみあわせながら、奇妙な恰好かっこうで、その草の上に倒れているのを彼は見た。

そのとき彼の背後からお嬢さんの高らかな笑い声が聞えてきた。

彼はそれを聞きながら、自分の体の中にいきなり悪い音楽のようなものが湧わき上つてくるのを感じた。

悪い音楽。たしかにそうだ。彼を受持っているすこし頭の悪い天使がときどき調子はずれのギターを弾ひきだすのにちがいない。

彼は自分の受持の天使の頭の悪さにはいつも閉口していた。彼の天使は彼に一度も正確にカルタの札を分配してくれたことがないのだ。

或る晩のことであつた。

彼は彼女の家から彼のホテルへのまっ暗こみちな小径を、なんだか得休

の知れない空虚な気持を持てあましながら帰りつつあった。

その時前方の暗やみの中から一組の若い西洋人達が近づいてくるのを彼は認めた。

男の方は懐中電気でもって足もとを照らしていた。そしてときどきその電気のひかりを女の顔の上にあてた。するとそのきらきら光る小さな円の中に若い女の顔がまぶしそうに浮び出た。

それを見るためには、その女が彼よりずっと脊が高かったので、彼はほとんど見上げるようにしなければならなかった。そういう姿勢で見ると、若い女の顔はいかにも神神じんじんしく思われた。

一瞬間の後、男は再び懐中電気をまっ暗な足もとに落した。

彼は彼一等らとすれちがいがいながら、彼等の腕と腕が頭文字かしらもじのようにからみあっているのを発見した。それから彼はその暗やみの中に一人きりに取残されながら、なんだか気味のわるいくらいに亢奮こうふんした。彼は死にたいような気にさえなった。

そういう気持は悪い音楽を聞いたあとの感動に非常に似ていた。

そういう音楽的なへんな亢奮をしきりに振り落そうとして、彼はその朝もそこら中をむちゃくちゃに歩き廻った。そのうちに彼は一つの見知らない小径に出た。

そこいらは一度も来たことのないせいか、町から非常に遠く離れてしまったかのように思われた。

そのとき彼はふと自分の名前を呼ばれたような気がした。あたりを見廻してみたが、それらしいものは見えなかった。おかしいなと思っていると、また彼の名前を呼ぶものがあつた。今度はややはっきり聞えたのでその声のした方を振り向いてみると、そこには彼の

いる小径から三尺ばかり高まった草叢くさむらがあり、その向うに一人の男がカンバスに向っているのが見えるのだ。その男の顔を見ると彼は一人の友人を思い出した。

彼はやっとこさその上に這はい上って、その友人のそばへ近よって行った。が、その友人は、彼にはべつに何にも話しかけようとせず、そのまま熱心にカンバスに向っていた。彼も話しかけない方がいいのだろうと思った。そうしてそこへ腰を下ろしたまま黙ってその描きかけの絵を見まもっていた。彼はときどきその絵のモチイフになっっている風景をそのあたりに捜したりした。しかしそれらしい風景はどうしても捜しあてることが出来なかった。なにしろその画布の上には、唯ただ、さまざまな色をした魚のようなものや小鳥のようなものや花のようなものが入り混っているだけだったから。

しばらくその奇妙な絵に見入っていたが、やがて彼はそつと立ちあがった。すると立ちあがりつつある彼を見上げながら、友人は言った。

「まあ、いいじゃないか。僕は今日きょう東京へ帰るんだよ」

「今日帰る？ だって、まだその絵、出来てないんじゃないの？」

「出来てないよ。だが僕はもう帰らなければならぬんだ」

「どうしてさ」

友人はそれに答えるかわりに再び自分の絵の上に眼を落した。しばらくその一部分に彼の眼は強く吸いつけられているかのようにであった。

「#アステリズム、1-12-94」

彼はひとり先きにホテルに帰って、昼食を共にしようとして約束をしたさっきの友人の来るのを客間で待っていた。

彼は客間の窓から顔を出して中庭に咲いている向日葵ひまわりの花をぼんやり眺ながめていた。それは西洋人よりも脊高く伸びていた。

ホテルの裏のテニス・コートからはまるで三鞭酒シヤンパンを抜くようなラケットの音が愉快そうに聞えてくるのである。

彼は突然立上った。そして窓ぎわの卓子の前に坐り直した。それから彼はペンを取りあげた。しかしその上にはあいにく一枚の紙もなかったので、彼はそこに備え付けの大きな吸取紙じの上に不恰好ふかっこうな字をいくつもにじませて行った。

「#ここから3字下げ」

ホテルは鸚鵡おうむ

鸚鵡の耳からジュリエットが顔を出す

しかしロミオは居りません

ロミオはテニスをしているのでしょう

鸚鵡が口をあけたら

黒ん坊がまる見えになった

「#ここで字下げ終わり」

彼はもう一度それを読み返そうとしたが、すっかりインクがにじんでしまっていて何を書いたのか少しも分らなくなってしまうていた。

それでもやはり彼は、約束の時間よりもすこし遅れてやってきた友人がひよいとそれを覗のぞき込んだ時には、それを裏返しにした。

「隠さなくてもいいじゃないか？」

「これは何でもないんだ」

「ちゃんと知ってるよ」

「何をさ」

「一昨日、いいところを見ちゃったから」

「一昨日だって？　なんだ、あれか」

「だから今日は君が奢るんだよ」

「あれは、君、そんなもんじゃないよ」

あれはただ浅間山の麓まで自動車で彼女たちのお供をしたただけだ。

「たったそれだけ」だったのだ。

彼は再びその時の夫人の言葉を思い出した。そしてひとりで顔を赧くした。

それから彼等は食堂へはいつて行った。それを機会に彼は話題を換えようとした。

「ときに君の絵はどうしたい？」

「僕の絵？　あれはあのままだ」

「惜しいじゃないか？」

「どうも仕方がないんだ。ここは風景は上等だが、描きにくくて困るね。去年も僕は描きに来たんだが駄目さ。空気があんまり良すぎるんだね。どんなに遠くの木の間葉でも、一枚一枚はつきり見えてしまっただ。それでどうにもならなくなるんだよ」

「ふん、そんなものかね……」

彼はスープを匙ですくいながら、思わずその手を休めて、自分自身のことを考えた。ことによると、自分と彼女との関係がちつとも思うように進行しないのは、ひとつはこの空気があんまり良すぎて、どんなに小さな心理までも互にはつきり見えてしまうからかも知れない。彼はそれを信じようとさえした。



そして彼は考えた。描きかけの風景画をたずさえてこれから東京へ帰ろうとしているこの友人と同様に、自分もまた数日したら、それも恐らく描きかけのままになるであろう自分の「ルウベンスの偽画」をたずさえて再びここを立ち去るより他はないであろうか？

午後になって、その友人を町はずれまで見送ってから、彼はひとりで彼女の家を訪れた。

丁度ふたりでお茶を飲んでいるところだった。彼を見ると夫人は急に思い出したように彼女に言った。

「あの乳母車うはくろまにのっている写真をお見せしないこと？」

彼女は笑いながらその写真を取りに次の部屋にはいつていった。

その間、彼の眼のうちらには、彼女の幼時の写真の古い葺きのような色がひとりでに溜たまってくるようだった。次の部屋から再び帰ってきた彼女は彼に二枚の写真を渡した。が、それは二枚とも彼の眼をまごつかせたくらいに撮影したばかりの新鮮な写真だった。それはこの夏この別荘の庭で、彼女が籐椅子とういすに腰かけているところを撮とらせたものらしかった。

「どつちがよく撮れて？」彼女が訊きいた。

彼は少しどきまぎしながら、近視のように眼を細くしてその二つの写真を見較みくらべた。彼は何とはなしにその一つの方を指さしてしまった。そのとき彼の指の先がそつとその写真の頬ほおに触れた。彼は薔薇ばらの花弁に触れたように思った。

すると夫人はもう一つの方の写真を取りあげながら言った。

「でも、この方がこの人には似ていなくて？」

そう言われてみると、彼にもその方が現実の彼女によりよく似て

いるように思われた。そしてもう一つの方は彼の空想の中の彼女に、  
「ルウベンスの偽画」にそっくりなのだと思った。

しばらくしてから、彼は実物を見ないうちに消えてしまったさつき  
の古い茸のような色をしたヴィジョンを思い出した。

「乳母車というのはどれですか？」

「乳母車？」

夫人はちょっと分らないような表情をした。が、すぐその表情は  
消えた。そしてそれはいつもの、やさしいような皮肉なような独特  
の微笑に変わっていった。

「その籐椅子のことなのよ」

そしてそのように和やかな<sup>なご</sup>空気が、相変わらず、その午後のすべての  
時間の上にあった。

これがあれほど彼の待ちきれずに待っていたところの幸福な時間  
であろうか？

彼女たちから離れている間中、彼は彼女たちにたまらなく会いた  
がっていた。そのあまりに、彼は彼の「ルウベンスの偽画」を自分  
勝手につくり上げてしまうのだ。すると今度はその心像<sup>イマージュ</sup>が本当の彼  
女によく似ているかどうかを知りたがりだす。そしてそれがますます  
彼を彼女たちに会いたがらせるのであった。

ところが現在ののように、自分が彼女たちの前にいる瞬間は、彼は  
ただそのことだけですっかり満足してしまうのだ。そしてその瞬間  
までの、その心像<sup>イマージュ</sup>が本当の彼女によく似ているかどうかという一切  
の気がかりは、忘れるともなく忘れてしまっている。それというの  
も、自分が彼女たちの前にいるのだということを出来るだけ生き生

きと感じていたいたために、その間中、彼はその他のあらゆることを、果してその心像イマアジユが本当の彼女によく似ているかどうかという前日からの宿題さえも、すっかり犠牲にしてしまふからだった。

しかし漠然ばくぜんながらではあるが、自分の前にいる少女とその心像の少女とは全く別な二個の存在であるような気もしないではなかった。ひよつとしたら、彼の描きかけの「ルウベンスの偽画」の女主人公の持っている薔薇の皮膚そのままのものは、いま彼の前にいるところの少女に欠けているかも知れないのだ。

二つの写真のエピソードが彼のそういう考えをいくらかはつきりさせた。

夕暮になって、彼はホテルへのうす暗い小径をひとりで帰っていた。

そのとき彼はその小径に沿うた木立の奥の、大きい栗の木の枝に何か得体の知れないものが登っていて、しきりにそれを揺ぶっているのを認めた。

彼が不安そうに、ふとすこし頭の悪い自分の受持の天使のことを思いうかべながら、それを見あげていると、なんだか浅黒い色をした動物がその樹からいきなり飛び下りてきた。それは一匹の栗鼠りすだった。

「ばかな栗鼠だな」

そんなことを思わずつぶやきながら、彼はうす暗い木立の中をあわてて尻尾しっぽを脊なかにのせて走り去ってゆく栗鼠を、その見えなくなるまで見つめていた。

底本：「燃ゆる頬・聖家族」新潮文庫、新潮社

1947（昭和22）年11月30日発行

1970（昭和45）年3月30日26刷改版

1987（昭和62）年10月20日51刷

初出：第1稿、「山繭」第2巻第6号

1927（昭和2）年2月1日号

改稿、「創作月刊」文藝春秋社

1929（昭和4）年1月号

初収単行本：「不器用な天使」改造社

1930（昭和5）年7月3日

改稿版：「ルウベンスの偽画」江川書房

1933（昭和8）年2月1日

初出情報は、「堀辰雄全集第1巻」筑摩書房、1977（昭和52）年5月28日、解題による。

入力：kompass

校正：染川隆俊

2004年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。